

尋常小学唱歌「故郷」における一考察

國枝春恵*・山崎浩隆*

A study of "Furusato" in Jinjyou Shougaku Shouka

Harue KUNIEDA and Hiroataka YAMASAKI

Abstract

The collection of songs known as *Jinjyou Shougaku Shouka* (Primary School Songs) is very popular in Japan, especially the song "Furusato". From the late Meiji until the beginning of Taisyou era, it seems that it was made under the influence of hymns that were introduced by Christian missionaries. The Ministry of Education was in charge of the committee of the editorial department in those days. One hundred and twenty school songs were collected together—some already existing in the precursor collection *Jinjyou Shougaku Tokuhon Shouka* (Primary School Songs Reader) and some newly commissioned from poets and composers. However, it was not obvious who wrote which song and who wrote which poem. As yet the autograph scores and manuscripts of the originals have never been seen. This short paper investigates and analyzes the background of the *Jinjyou Shougaku Shouka* collection.

Key words: Primary school songs, Hymns, Autograph scores

はじめに

『尋常小学唱歌』は、明治43年7月14日に発行された『尋常小学読本唱歌』を前身として生まれたもので、明治44年から大正3年にかけて発行された。後に文部省唱歌と呼ばれるようになった第1学年用から第6学年用までの全6冊、唱歌120曲である。「故郷」は、大正3年6月18日刊行第6学年用(全19曲目)唱歌として掲載された¹⁾。明治後半期には、多くの唱歌集が刊行されたが、文部省が東京音楽学校²⁾に協力を要請して唱歌集を編纂するということは、我が国の唱歌教育に大きな期待を抱く衝撃的な事業であったと言えよう。

文部省に設置された小学唱歌教科書編纂委員は以下の通りである³⁾。作詞委員 委員長 芳賀矢一 委員 上田万年 尾上八郎 高野辰之 武島又次郎 八波則吉 佐々木信綱 吉丸一昌 / 作曲委員 委員長 湯原元一 委員 上眞行 小山作之助 島崎赤太郎 楠美恩三郎 田村虎蔵 岡野貞一 南能衛

多くの日本人に親しまれてきた愛唱歌「故郷」は、現在一応、高野辰之作詞、岡野貞一作曲ということになっているが、実は自筆譜、詩稿が行方不明であ

り、今後の発見が待ち望まれるものである⁴⁾。当時、『尋常小学唱歌』は、編纂委員会の合議で作られており、各曲の作詞者作曲者は匿名とされていた⁵⁾。

「故郷」は、平成23年3月11日に起きた巨大地震と津波による東日本大震災の復興支援音楽会の際に、東北地方のみならず日本全国で歌われ、世界的なオペラ歌手プラシド・ドミンゴが日本語で詠唱したことは記憶に新しい⁶⁾。誰もが口ずさんだ経験のある唱歌「故郷」であるが、その音楽に脈々と流れているものは讚美歌の影響であり⁷⁾、また4分の3拍子⁸⁾であるという特徴がある。

本稿は、文部省唱歌「故郷」の背景を探りながら、その分析と考察を試みるものである。

明治時代の小学唱歌集出版について

明治10年、東京女子師範学校附属幼稚園の開園式で初めて唱歌が和洋折衷で演奏されたという通称『保育唱歌』⁹⁾から『尋常小学唱歌』が編纂された明治時代後期に至るまで、夥しい量の小学唱歌が作詞、作曲された。下記に『日本教科書大系』の「唱歌教科書総目録」を示す(表1)。

* 熊本大学教育学部音楽科

尋常小学唱歌「故郷」

表1 唱歌教科書総目録

	唱歌集名	発行年	著者・編者等
1	唱歌	明治11	京都女学校
2	小学唱歌集	明治14~17	文部省音楽取調掛編
3	学習院歩操唱歌	明治18	里見義、音楽取調所
4	東流二弦琴唱歌集	明治18	加藤盧船
5	幼稚園唱歌集	明治20	文部省音楽取調掛編
6	幼稚園唱歌集	明治20	濱銅定造
7	新撰小学唱歌集	明治21	原田砂平
8	尋常唱歌集	明治21	吉田猛橋
9	明治唱歌	明治21	大和田建樹、奥好義
10	明治唱歌 幼稚の巻	明治21	大和田建樹、奥好義
11	学校用唱歌	明治22	二宮勝壽
12	軍歌集	明治22	倉知甲子太郎
13	軍歌集	明治22	藤井竹一
14	憲法発布頌	明治22	東京音楽学校
15	唱歌集	明治22	奥好義
16	新編唱歌集	明治22	井上善文
17	音楽初歩附唱歌集	明治23	北条芳三郎
18	学校歌曲集	明治23	恒川録之助
19	増訂小学開発唱歌集	明治23	加藤精一郎
20	帝国唱歌	明治23	恒川録之助
21	国民唱歌集	明治24	小山作之助
22	新定唱歌集	明治24	岩城宏
23	新編唱歌集	明治24	阿部誠
24	尋常小学帝国唱歌	明治25	大和田建樹
25	高等小学帝国唱歌	明治25	大和田建樹
26	小学唱歌	明治25	伊澤修二
27	小学唱歌集 高二・三	明治25	村岡留次郎
28	尋常科高等科小学唱歌	明治25	平川雄三郎
29	大祭り日唱歌集	明治25	岡弥吉
30	日本軍歌	明治26	納所弁次郎
31	儀式唱歌 附祝日大祭り唱歌	明治26	奥好義
32	祝日大祭り唱歌	明治26	文部省
33	小学明治唱歌	明治26	菟道春千代
34	新編軍歌 附祝日大祭り唱歌	明治26	奥好義
35	精神教育對外軍歌	明治26	湯地文雄
36	幼年唱歌集	明治26	佐々木信綱
37	銀婚式唱歌 附銀婚式の話	明治27	菟道春千代 永井建子
38	銀婚式奉祝唱歌	明治27	大和田建樹 奥好義
39	小学修身唱歌	明治27	菟道春千代
40	小学唱歌集	明治27	白井規矩郎
41	大婚二十五年奉祝唱歌	明治27	中村秋香 小山作之助
42	婦人従軍歌	明治27	菊間義清 奥好義
43	凱旋軍歌集	明治28	日本軍歌会
44	かちどき	明治28	小山作之助
45	国民軍歌	明治28	菟道春千代
46	招魂祭の歌	明治28	山田源一郎
47	尋常小学新体読本唱歌集	明治28	白井規矩郎
48	新撰小学唱歌集	明治28	小島壽雄
49	大東軍歌	明治28	鳥居枕
50	忠君愛国小学唱歌集	明治28	渡辺四郎
51	忠勇軍歌集	明治28	小山作之助
52	平安奠都紀年唱歌	明治28	加藤里路 楠美恩三郎
53	明治唱歌抜粋小学唱歌	明治28	大和田建樹、奥好義
54	歴史唱歌	明治28	奥好義
55	学校必用唱歌集	明治29	加藤里路 楠美恩三郎
56	教育勸語唱歌集	明治29	豊美重由 元橋義教
57	増補再版小学修身唱歌	明治29	恒川録之助
58	新編帝国軍歌	明治29	元橋義教 多梅雅
59	大捷軍歌	明治29	山田源一郎
60	教科適用新唱歌	明治30	山田源一郎
61	新式唱歌	明治30	鈴木米次郎
62	学校唱歌	明治31	明治音楽会
63	国歌唱歌集	明治31	小山作之助
64	小学校用読本唱歌	明治31	輪岡美賀雄
65	学校生徒行軍用 湊川	明治32	落合直文 奥山朝恭
66	新撰小学唱歌	明治32	萩原太郎
67	新編日本唱歌	明治32	大和田建樹、多梅雅
68	衛生唱歌	明治33	三島通良 鈴木米次郎
69	教育勸語唱歌	明治33	武島又次郎 小山作之助
70	重音唱歌集	明治33	小山作之助
71	修正小学読本唱歌	明治33	目賀田萬世吉
72	祝日大祭り唱歌重音譜	明治33	東京音楽学校
73	初等教育英語唱歌	明治33	石原重雄
74	新編帝国唱歌	明治33	渡辺弘人
75	世界唱歌	明治33	与謝野鉄幹 奥好義
76	地理教育世界唱歌	明治33	大和田建樹、納所弁次郎
77	地理教育鉄道唱歌	明治33	大和田建樹、納所弁次郎
78	地理教育鉄道唱歌	明治33	高栄堂編集部
79	地理教育東京唱歌	明治33	武島又次郎 小山作之助
80	東京唱歌	明治33	大槻如電 山田武城
81	南朝忠臣歌	明治33	落合直文 奥山朝恭
82	歴史教育愛国唱歌	明治33	中村秋香 小山作之助
83	教科適用新体唱歌	明治34	米野鹿之助 小林貞吉
84	公德唱歌	明治34	渋谷愛 山田源一郎
85	国民教育忠勇唱歌	明治34	大和田建樹
86	四条畷曲	明治34	落合直文 小出雷吉

87	小学校教科用123唱歌集	明治34	入江好治郎
88	小学生徒唱歌の友	明治34	今井政兵衛
89	尋常国語読本唱歌	明治34	小山作之助
90	高等国語読本唱歌	明治34	小山作之助
91	世界一周唱歌	明治34	池邊義象 田村虎蔵
92	曾我兄弟の歌	明治34	鈴木忠孝
93	体育唱歌	明治34	丸山正彦 小山作之助
94	帝国憲法唱歌	明治34	上瀧安正
95	読本唱歌	明治34	富山房編集所
96	風俗改善公德唱歌	明治34	石原和三郎 田村虎蔵
97	豊年唱歌	明治34	共益商社楽器店
98	幼稚園唱歌集	明治34	瀧藤太郎
99	歴史修身唱歌 晋公	明治34	石原和三郎 田村虎蔵
100	晋公唱歌	明治35	帝国教育会晋公会 東京音楽学校
101	晋公唱歌	明治35	藤園主人 田村虎蔵
102	菊池唱歌	明治35	大和田建樹、上眞行
103	勤儉歌	明治35	首藤文雄 鮫島永領
104	金言唱歌	明治35	桑田春風 田村虎蔵
105	高等小学帝国唱歌	明治35	大和田建樹
106	公德唱歌	明治35	大和田建樹 小山作之助
107	国語読本唱歌 尋常科上下 高等科一〜四	明治35	帝国書籍株式会社
108	修身教育十二ヶ月唱歌	明治35	中村秋香
109	修身唱歌	明治35	金港堂
110	春夏秋冬 花鳥唱歌	明治35	大和田建樹
111	春夏秋冬 散歩唱歌	明治35	大和田建樹、多梅雅
112	唱歌教科書	明治35	共益商社楽器店
113	新撰国民唱歌	明治35	小山作之助
114	新撰唱歌 尋常科用	明治35	近藤猪八郎
115	新撰唱歌 高等科用	明治35	近藤猪八郎
116	日英同盟の歌	明治35	藤園主人 田村虎蔵
117	白虎隊	明治35	小松忠次郎 長瀧士
118	富士唱歌	明治35	大和田建樹、上眞行
119	むすぶ盟 日英同盟の歌	明治35	大和田建樹 田村虎蔵
120	陸奥の吹雪	明治35	落合直文 高峯俠士
121	大阪市歌	明治36	柳芳風 小山作之助
122	金沢兼六公園唱歌	明治36	新清次郎
123	教科適用幼年唱歌	明治36	納所弁次郎 田村虎蔵
124	教科適用少年唱歌	明治36	納所弁次郎 田村虎蔵
125	言文一致唱歌	明治36	帝国教育会内言文一致会
126	公德養成国民唱歌	明治36	帝国教育会
127	国民教育新撰唱歌	明治36	田村虎蔵
128	護国の歌	明治36	石原和三郎 田村虎蔵
129	小学校教科用学童唱歌	明治36	新清次郎
130	小学公德新唱歌	明治36	西村湖洞
131	小学唱歌教材	明治36	高濱孝一
132	新教育唱歌	明治36	小出雷吉
133	東京府民公德唱歌	明治36	大和田建樹 小山作之助
134	動物虐待防止の歌 慈愛の海	明治36	大和田建樹
135	山田唱歌集	明治36	山田源一郎
136	幼稚唱歌	明治36	吉田恒三
137	輪唱歌集	明治36	小山作之助
138	輪唱複音教科書	明治36	鈴木米次郎 野村威仁
139	青児唱歌 春の巻	明治37	渡邊森蔵
140	王師遠征歌	明治37	日本音楽会
141	國の光	明治37	曾弥荒助 上眞行
142	軍国唱歌 敵は幾万	明治37	開成館音楽課
143	軍神 橋中佐	明治37	鏡田徳三郎 安田俊高
144	言文一致 日本唱歌	明治37	近藤出来治
145	興国新唱歌	明治37	微笑軒書房
146	国定小学読本唱歌 尋常科	明治37	田村虎蔵
147	国定小学読本唱歌 高等科	明治37	田村虎蔵
148	国定小学読本唱歌集 尋常の部	明治37	内田象太郎 楠美恩三郎 岡野貞一
149	国定小学読本唱歌集 高等の部	明治37	内田象太郎 楠美恩三郎 岡野貞一
150	國母陛下の御瑞夢 附大和魂	明治37	加藤義清 納所弁次郎
151	国民唱歌日本海軍	明治37	大和田建樹 小山作之助
152	国民唱歌日本陸軍	明治37	大和田建樹
153	祝捷軍歌	明治37	伊東小文司
154	小学校用新編唱歌教科書 高等科之部	明治37	渡邊角次
155	進軍歌	明治37	福本誠 内田象太郎
156	尋常小学読本唱歌	明治37	中田書店編集所
157	征露軍歌	明治37	池邊義象 楠美恩三郎
158	征露軍歌集	明治37	岡田
159	征露軍歌捷 我が国民	明治37	池邊義象 納所弁次郎
160	征露軍歌 橋中佐	明治37	大和田建樹 納所弁次郎
161	征露軍歌 廣瀬中佐	明治37	大和田建樹 納所弁次郎
162	征露軍歌 旅順口陥落	明治37	池邊義象 納所弁次郎
163	征露の歌	明治37	下田孝子 納所弁次郎
164	戦争唱歌	明治37	文部省
165	討露軍歌 かちどき	明治37	共益商社楽器店
166	日本軍艦唱歌	明治37	旅順鳴舟 河原林吉利
167	日本戦捷軍歌	明治37	修文館編集部
168	日本風景唱歌	明治37	大和田建樹
169	日露軍歌	明治37	大和田建樹 田村虎蔵
170	日露軍歌 決死隊	明治37	大和田建樹 田村虎蔵
171	日露戦争軍歌	明治37	伊東小文司
172	日露戦争 国民唱歌	明治37	佐々木信綱 上眞行 小山作之助
173	日露戦争 大捷軍歌 海戦の巻	明治37	飯田季治 納所弁次郎
174	日露戦争 大捷軍歌 陸戦の巻	明治37	飯田季治 納所弁次郎
175	旅順陥落 祝捷軍歌	明治37	大和田建樹 田村虎蔵

176	旅順攻撃 七十七士唱歌	明治37	楓蔭散史 農田東海
177	露西亞征服軍歌	明治37	立川清 鈴木樓臺
178	凱旋	明治38	文部省
179	皆兵軍歌	明治38	日高藤吉郎
180	学校及家庭用言文一致叙事唱歌	明治38	旗ヶ下飛泉 三善和氣
181	軍国唱歌 日本海大海戦	明治38	加藤義清 目貫田萬世吉
182	軍国民唱歌 東郷大将	明治38	武笠三 赤尾寅吉
183	高等小学 修身唱歌	明治38	吉田信太
184	国定尋常小学読本唱歌	明治38	吉田信太
185	国定高等小学読本唱歌	明治38	吉田信太
186	国定小学読本唱歌	明治38	田村虎藏
187	国民教育日本軍人	明治38	大和田建樹 納所弁次郎
188	国民唱歌世界万国	明治38	芳賀矢一
189	唱歌 美はしき天然	明治38	田中穂瑞
190	少年泰山	明治38	永井建子
191	征露凱旋の歌	明治38	大和田建樹 田村虎藏
192	世界に冠たる日本国	明治38	大和田建樹 田村虎藏
193	尋常小学唱歌	明治38	佐々木吉三郎 納所弁次郎 田村虎藏
194	日本海の大戦	明治38	旗野十一郎 楠美恩三郎
195	郵便貯金唱歌	明治38	大和田建樹 田山完亮
196	我國の赤十字	明治38	佐々木信綱 田村虎藏
197	愛馬	明治39	林田撫水 三好和氣
198	行進唱歌 秋の曲	明治39	大和田建樹 田村虎藏
199	高等 小学唱歌第一—四学年	明治39	大橋綱造 納所弁次郎 田村虎藏
200	新編教育唱歌集	明治39	教育音楽講習会
201	大親兵士の歌	明治39	南茂樹 野村成仁
202	日露戦役 戦捷紀年唱歌	明治39	吉丸一昌 石原重雄
203	満韓鉄道唱歌	明治39	
204	陸軍戦捷 紀年日祝歌	明治39	旗野十一郎 渡邊森藏
205	海軍教育 帝国艦名唱歌	明治40	鈴木栄之助
206	校外教授 野外唱歌	明治40	蘆田恵之助 田村虎藏
207	実業教育 東京勸業博覧会唱歌	明治40	博報堂編纂局
208	新撰唱歌 花の都	明治40	御園生金太郎 田村虎藏
209	東京唱歌	明治40	東京市教育会
210	内地旅行唱歌 関東、奥羽、本州中部北の巻	明治40	大和田建樹 田村虎藏
211	日本名勝唱歌	明治40	大和田建樹 納所弁次郎
212	軍艦唱歌 海軍の光	明治41	石原和太郎 田村虎藏 成瀬藏治
213	開国五十年唱歌	明治41	山田美砂齊 納所弁次郎
214	国定教材 二宮尊徳先生唱歌	明治41	山崎明軒 天谷秀
215	京の名所	明治42	大和田建樹 田村虎藏
216	高等小学唱歌	明治42	大橋綱造 納所弁次郎 田村虎藏
217	帝国唱歌 神武天皇	明治42	大和田建樹 田村虎藏
218	東海道唱歌 汽車	明治42	大和田建樹 田村虎藏
219	東京名勝日曜遊び 公園唱歌	明治42	大和田建樹 小山作之助
220	藤公唱歌	明治42	永井素岳 多忠基
221	奈良の公園	明治42	大和田建樹 田村虎藏
222	紀年唱歌 陸海軍	明治43	佐々木信綱 園山民平
223	史談唱歌 平忠度	明治43	大和田建樹 田村虎藏
224	唱歌 俱利伽羅峠	明治43	八波則吉 大西安世
225	尋常小学読本唱歌	明治43	文部省

一覧表を見ると、明治11年京都女学校『唱歌』から明治43年文部省『尋常小学読本唱歌』まで225の唱歌集が編纂されている。明治14年～17年に文部省音楽取調掛が編纂した『小学唱歌集』には、第78番「菊」（庭の千草）等讚美歌から唱歌になった作品が含まれている¹⁰⁾。また、日本語讚美歌集は明治7年から出版されている。日本人作詞家、作曲家による『尋常小学唱歌』全120曲は、日本語讚美歌と多くの小学唱歌の誕生と変遷の時代を経て、明治時代後期に重要な文化財として登場したものであると言える。

作詞者・作曲者について

小学唱歌教科書編纂委員会の合議で作られた唱歌は、どのような手順で誕生したのであろうか。明治42年6月18日より書かれている『小學唱歌教科書編纂日誌』¹¹⁾には、「1 讀本中ノ歌詞に就キ作曲スベキ分ヲ選定シ次會ニ之ヲ決定スルコト」また、「1 1 歌詞ニ2 2 曲以上ヲ附スルコトアルモ妨ケナキコト」等の記述がある。

作詞主任は吉丸一昌、作曲主任は島崎赤太郎が担った。吉丸一昌は、明治6年9月15日現大分市臼杵市に生まれ、熊本五高より東京帝国大学国語科へ進み、卒業後、明治41年35歳で東京音楽学校教授、翌42年に文部省小学校唱歌教科書編纂委員となった。島崎赤太郎は、明治7年7月9日東京築地で生まれ、クリスチャンである。東京音楽学校を卒業後、明治35年、文部省給費研究員としてドイツ、ライプツィヒ王立音楽院へ留学、明治39年に帰国し、東京音楽学校教授になった俊英である¹²⁾。

第2回委員会では、「1 國定讀本第9卷ノ歌詞提出」という記述もあり、まず作曲すべき歌詞を選定していった様子がうかがえる。7月7日には、「小學唱歌作曲要件として、各学年の曲数、音程、音域、拍子の種類、調子、口調（リズム）」の詳細が決定されている。その後の委員会において、「下ノ歌詞及樂曲ヲ審査修正ス」等の記述が多々見られるが、担当者名については臥せられてあり、作詞者、作曲者は特定できない¹³⁾。

さて、唱歌『故郷』の作詞者とみなされている¹⁴⁾国文学者高野辰之は、明治9年4月13日に、長野県下水内郡永田村大字水江で生まれ、21歳で長野県尋常師範学校（現信州大学教育学部）を卒業し、26歳の時、国文学研究の道に進むため上京、文部省国語教科書編纂委員に任命される。その後、明治41年、32歳で東京音楽学校に赴任、明治42年に文部省小学校唱歌教科書編纂委員となった。長野県中野市の高野辰之記念館や、野沢温泉村にある〔記念館〕おぼろ月夜の館（斑山文庫）は、辰之が使用した教科書、ノート等の展示や書斎が復元されてある。次に、高野辰之が20歳の頃書いた詩集『故山』前編（明治29年7月）に収められている、父母や故郷への想いが込められている長篇詩の一部を示す¹⁵⁾。

「故郷の平和」
 一年に一度帰り父母故旧に見えれば可なり。暑中はよそに過してむ冬に帰らばという人のいぶかしさよ—中略—いでおもかへし折々給ふ母の御文を『そこにはかはりなう努めてとのみ知らすれど告げやらばおもひ悩まんとて 例ならぬをもいはでこそあれなきにしもあらざむ —中略—』ああかかる母のみなさげに身も世も忘れぬものやはある。—中略—如何なる浮枕に逢ふも如何に勞するも如何なるところを流浪するも再び故国にかへりて平和を得ん—の一条の希望われも人も有するものなり。誰人も生まれし処に死せんことは誰ひとも希ふ所にして此希望ありてこそ目前の痛苦も暫時は忘らるるなれど実に故郷とはかかるものにあらずや。—後略

作曲者とみなされている¹⁶⁾当時、東京音楽学校教授の岡野貞一は、敬虔なクリスチャンであり、本郷中央教会のオルガニストを40年務められた寡黙な人だったという¹⁷⁾。岡野貞一は、明治11年2月16日、鳥取県古市村の士族の家に生まれ、因幡高等小学校から音楽学校入試の準備をするべく岡山のキリスト教系私立薇陽学院に進み、東京音楽学校（現東京藝術大学音楽学部）に入学。研究科卒業後、唱歌の授業を担当、明治39年、28歳で東京音楽学校助教授、明治40年に文部省小学校唱歌教科書編纂委員になっている。

本郷中央教会は、明治24年カナダ・メソジスト教会のミッションにより創立され、貞一は、会堂の素晴らしいパイプ・オルガンを演奏して、礼拝音楽や聖歌隊の指揮を受け持っていたようである。その後、関東大震災で会堂が倒壊し、パイプ・オルガンは火災で焼失、昭和4年に会堂が再建された時に貞一選定による最高級の山野リード・オルガンになった。（現在も本郷中央教会にあり、筆者も一度弾かせて頂いた。）

楽譜1 聖歌161番（きよきみたま）
日本基督教団讃美歌委員会（1931）¹⁸⁾

[楽譜1]の聖歌161番（きよきみたま）は、岡野貞一の愛唱歌であり、貞一の告別式の際にも歌われたようである。同讃美歌は、日本基督教団出版局（1974）讃美歌集では第185番であり、ト長調になっている。

次に尋常小学唱歌／第6学年用（1914）「故郷」を[楽譜2]に掲載する。

順次進行¹⁹⁾による旋律線と2小節と6小節の付点音符のリズムが特徴的であり、6音と4音のフレーズによる六四調²⁰⁾である。また9小節から12までにかけて8分音符による動きが顕著である。そのため歌詞は、「ゆーめは いーまも めーぐーりーて」と、少し間のびしたように聞こえるかもしれない²¹⁾。しかしながら、最後の4小節を感動的に歌うための旋律線になっているとも言えよう。

楽譜2 尋常小学唱歌／第6学年用（1914）「故郷」

次に唱歌「故郷」の歌詞を、讃美歌185番（きよきみたま）の引用から替え歌を試作してみる。小学唱歌には、多くの替え歌があるのも周知の事実である²²⁾。

楽譜3

きよき みたま みひかり
 てらした まえ こころを
 うちなる つみを きよめたまえ
 みたした まえ よろこび

この替え歌には賛否両論あろうが、人々の愛唱歌『故郷』が、讃美歌調唱歌であるという顕著な例である。

〔楽譜4〕には讃美歌475番（うきよのたび）を掲載する。Welsh Hymn Melodyによる4分3拍子のこの讃美歌は、2, 6, 10, 12, 14小節に『故郷』と同様に付点音符のリズムが見られ、歌詞も六四調であり、関連性が指摘されている²³⁾。

楽譜4 讃美歌475番（うきよのたび）
 日本基督教団出版局（1974）

475 永生 葬式

I'm but a stranger here
 Thomas Rowson Taylor, 1835 CAMERIA
 Welsh Hymn Melody in The Bristol Tune Book

うきよのたび ゆくみはまくら
 すべきいえなく うきとおそれたえず
 あれどあめこそわがふるさと

- ヨハ 14: 1-2 ホセ 13: 14 詩篇 68: 5-6 ヘブ 11: 13-14
- うき世のたび ゆく身は あれ野のかぜ すさめど、
 まくらすべき 家なく、 たびのおわり まちかし。
 うきとおそれ たえずあれど、 みねの吹雪 吹きたけれど、
 あめこそわが ふるさと。 あめこそわが ふるさと。
 - すくいぬしのみもとに
 とわのさかえ われ受けん。
 あいの友の ともにつどう
 あめこそわが ふるさと。

歌が、讃美歌並楽譜（1882）第25番「アメリカ」である。「アメリカ」という曲名は19世紀の米国プロテスタント讃美歌集で使われたものということである²⁴⁾。この曲は、有名な英国国歌“God Save the Queen”であり、7小節からの旋律が、「故郷」の最後の4小節に似ているのは、誰もが気がつくことであろう。多くの英国人によって詠唱された感動的なフレーズである。この讃美歌が、京都に同志社を創設したキリスト者、新島 襄の愛唱歌であったというのは大変興味深い²⁵⁾。

楽譜5 讃美歌並楽譜（1882）第25番「アメリカ」

AMERICA. 6s & 4s.

- 第二十三
- かこよきたり
 たまげよ
 きたりわきを
 みちよ
 - ひとよなごし
 心乃きる
 たこそめぐめ
 くだまよ
 - なぐさめあ
 きたりて
 あいよを
 みちひけ
- みなをうたふ
 さらぬのち
 ひとりみよや
 みこよきたり
 まよのぞみ
 これのうへよ
 きよたみらま
 よろこばいさ
 これをうたふ

新訂尋常小学唱歌『故郷』の
 伴奏部の和声分析

次に、昭和7年12月に完成された『新訂尋常小学唱歌』「故郷」²⁶⁾の和声分析を行ってみる。この伴奏付唱歌の作曲編纂委員には、信時潔、片山穎太郎等が新しく加わっている²⁷⁾。各和音記号については、島岡讓他著『総合和声』（1998）の記号を使用する。非和声音については、非和声音記号一覧を参考にす²⁸⁾（表2）。

〔楽譜5〕順次進行による旋律線で六四調であり、7小節からのフレーズが、「故郷」を彷彿させる讃美

表2 非和声音記号一覧

非和声音(転位音、又は和音外音)の種類

Altération	Alt. / Alter.	変質音
retard	R. / Ret.	掛留音
Pédale	Péd.	保続音
note de passage	P/ pas.	経過音
Broderie	B./ Br.	刺繍音
Double Broderie	D.B.	複刺繍音
appoggiature	ap./ app/	倚音
Double appoggiature	D. app.	二重倚音
Echappée	E. / Ech.	逸音
Anticipation	Ant.	先取音

た³¹⁾。13, 14小節は唱歌のリズムを強調するために8分音符による動きを止め、効果的な和音のみの伴奏になっている。全体的に余分な音の動きがなく、正統的で洗練された仕上がりといえよう。卓越した和声法、対位法の技術を習得している作曲者の仕事であることは間違いない³²⁾。

最後に、筆者による『故郷』編曲譜の和声分析を行う。これは、混声合唱とピアノのための『おらほのみどり』に含まれている³³⁾。1番の歌詞部分は、教会礼拝で会衆が歌う讚美歌を想定し、無伴奏混声合唱に編曲した³⁴⁾。

楽譜6 新訂尋常小学唱歌『故郷』

故郷

文部省唱歌
高野辰之 作詞
岡野貞一 作曲

♩ = 80

1.う さ ぎ お い し か の や ま は こ つ な が
2.い か に い ま す ち は は つ つ の
3.こ こ ろ ざ し を は た し て つ い つ の

つ り し か の か わ き ゆ め は い ま も に
し や と も が き あ め に か ぜ に
な ひ か か え ら ん や ま は あ お き

め ぐ り て わ す れ が た き ふ る さ さ と
つ け て も お す い が ず る ふ る さ さ と
ふ る 一 さ と お み ず は き よ き ふ る さ さ と

最初の4小節は、順次進行と刺繍音、経過音を伴った旋律に伴奏部右手が附随し、滑らかに上行して行く。5小節3拍目の属九和音根音省略形²⁹⁾、6小節2拍目の属七和音は、共に第2転回形を使用し、左手バスが順次進行になっている。7小節右手内声の経過音の動き等も、順次進行を活かしながら禁則処理を行って、極めて自然な伴奏になっている。9小節からは、バスに8分音符の動きを持たせ、ここも限定進行音³⁰⁾の重複等が綺麗に回避されている。11小節3拍目には導音F#が見当たらないが、次にI度に進行するので属和音の変換と分析し

楽譜7 『故郷』編曲

故郷

高野辰之 作詩
岡野貞一 作曲
国枝春恵 編曲

Sop. mp
Alt. う さ ぎ お い し か の や ま は こ つ な が
Trm.
Bas. mp

G: I — V — I — I' I IV I' ♯4

G: IV' I 2 II 7 I 2 ♯4 VI — II' II ♯7 I

G: V' — V — I' — I — IV' — II 7 III — VI —

G: IV 4 I' II 7 I' II 7 IV 4 II 7 V — I

冒頭の女声から始まる順次進行のフレーズは、原曲と同じ和声進行である。4小節から入るバスの動きから5小節の和声も順次進行によっている。6小節は部分的にVI度調になるが、7, 8小節は原曲と同じような終止形になっている。9, 10小節は、バスの動きに特徴があり、11, 12小節の和声は、原曲と違って偽終止に向かう³⁵⁾。13小節に登場するIV₉の和音は、近代的に響くかもしれない。14小節の上行する和声進行の後原曲と同じ終止形で終わる。原曲に良く見られる経過音を多用した編曲になっている。

まとめ

『尋常小学唱歌』「故郷」は、昭和の軍国主義者からは「めめしい」と非難され、戦時下では国民学校の教科書から排除されたという³⁶⁾。戦後、唱歌「故郷」は、昭和22年文部省編纂の『6年生の音楽』に復活をとげた³⁷⁾。そこには、「故郷」の奥深くに流れる、音楽の普遍性が存在するのではないだろうか。

また、唱歌「故郷」に関連のある讃美歌を調べ、そして替え歌を試作してみると、この唱歌が讃美歌調唱歌と言われる理由が明確になった。明治時代に宣教師たちが持ち込んだ多くの讃美歌に影響された音楽に、日本人の心の琴線に触れる故郷への想い、郷愁が込められている歌詞が美しく響く。この唱歌ほど、災難、苦境に遭遇してしまった日本人の心を癒す歌として、口ずさまれるものはないだろう。

しかしながら、「故郷」の素晴らしいオルガン伴奏譜を分析してみると、その音楽理論上の完成度の高さに驚くとともに、西洋音楽が導入されて半世紀経た時代に、和声法、対位法の達人が東京音楽学校でどのように存在していたのか、大きな疑問が浮かび上がって来た。それは、唱歌「故郷」に限った問題ではない。『尋常小学唱歌』全120曲の自筆譜、詩稿が未だに発見されていない現状において、作詞者、作曲者を特定するという作業が伝聞であった³⁸⁾かどうか、再度、検証されるべきではないかと思われる。そこには、当時、小学唱歌編纂委員会の作曲主任、島崎赤太郎の存在が大きく関係しているように思われる。

今後、多くの研究者たちによって、『尋常小学唱歌』の自筆譜、詩稿の調査、探究が、継続的に行われ、新たな見解が得られることを願いながら、本稿を閉じることとする。

引用・参考文献

- 『日本教科書大系（近代篇）』二十五巻唱歌p. 604, 講談社（1965）
- 現東京藝術大学音楽学部
- 堀内敬三・井上武士編『日本唱歌集』pp. 258~260, 岩波文庫（1958）
- 安田 寛著『「唱歌」という奇跡十二の物語』pp. 151~153, (2003)
赤井 励著『原典による近代唱歌集成—誕生・変遷・伝播—解説・論文・索引』pp. 70~75, ビクターエンターテイメント（2007）
- 山住正己著「国定教科書の期待した人物像—文部省唱歌の場合」『国民教育』60巻p. 49（1984）
- MSN産経ニュース（2011.5.22）
- 安田 寛著『「唱歌」という奇跡十二の物語』pp. 150~153, 文藝春秋（2003）
- 「～日本音楽に三拍子系、三分割のリズムがないことは、特筆すべきことである。」
小泉文夫著『日本の音』p. 342, 平凡社（1994）
（明治以降外国から入ってきた西洋音楽にたいして、日本の伝統音楽を指す）
- 現お茶の水女子大学
外山友子著「幼稚園唱歌事始」『東洋音楽研究』第43号pp. 1~51, (1978) 東洋音楽學會
- 安田 寛著『原典による近代唱歌集成—誕生・変遷・伝播—解説・論文・索引』p. 23, ビクターエンターテイメント（2007）
- 小學唱歌教科書編纂日誌『東京芸術大学百年史 東京音楽学校篇』第二巻, 第3章, 第4節 pp. 750~783
- 「島崎赤太郎は、明治時代に4声のフーガを作曲している～小山作之助、岡野貞一は書けなかった～」
赤井 励著『原典による近代唱歌集成—誕生・変遷・伝播—解説・論文・索引』pp. 210~215, ビクターエンターテイメント（2007）
- 赤井 励著『原典による近代唱歌集成—誕生・変遷・伝播—解説・論文・索引』pp. 70~75, ビクターエンターテイメント（2007）
- 吉丸一昌作詞という見解もある。
夢一べん冬著『わき出づる国歌：吉丸一昌魂の貴香花』pp. 8~15, (2006) 文芸社
- 高野良之他編集『高野辰之青春の想い』—師範学校当時の詩集より—pp. 26~29, 豊田村発行（2001）
- 安田 寛著『「唱歌」という奇跡十二の物語』p. 152, 文藝春秋（2003）
- 鈴木恵一著『岡野貞一とその名曲』pp. 104~109. (2005)
- 『聖謠』161番 昭和6年12月10日発行
日本基督教團讃美歌委員会（1931）
- 「特定の1声部における進行が2度の音程の時」島岡讓 他著『和声』理論と実習 I, p. 25, 音楽之友社（2000）
- 坂野信彦著『七五調の謎をとく—日本語リズム言論』p. 26, 大修館（2003）
- 北原白秋著「小学校唱歌々詞批判」（大正10年）『白秋全集』第20巻「詩文評論6」pp. 235~252, 岩波書店（1986）
- 鳥越 信著「唱歌の替え歌」『原典による近代唱歌集成—誕生・変遷・伝播—解説・論文・索引』pp. 252~256, ビクターエンターテイメント（2007）
- 松尾文子著「唱歌と讃美歌の関係をめぐる—考察」礼拝・音楽研究No. 28. pp. 4~6, (1997) 教会音楽研究
- 安田 寛著『「唱歌」という奇跡十二の物語』pp. 153~156, 文藝春秋（2003）
- 前掲書

- 26) 『原典による近代唱歌集成—演奏用楽譜Ⅱ』 p. 97, ビクターエンターテイメント (2007)
- 27) 堀内敬三・井上武士編『日本唱歌集』 pp. 258~260, 岩波文庫 (1958)
- 28) イヴォンヌ・デポルト／アラン・ベルノー著『和声法』 p. 139, 日仏音楽出版株式会社 (1990)
- 29) 「属九和音を構成する根音が省略されている形体」島岡譲 他著『和声』理論と実習Ⅰ, p. 88, 音楽之友社 (2000)
- 30) 前掲書「進行が限定されている音」, p. 71
- 31) 『6年生の音楽』では、バスの音と右手の和音のタイミングに修正が入っている『日本教科書大系 (近代篇)』二十五卷唱歌p. 586, 講談社 (1965)
- 32) 赤井 励は洋楽導入時期に、ドイツで作曲の基礎を学んだ島崎赤太郎の功績によるところが大きいと記述している。『原典による近代唱歌集成—誕生・変遷・伝播—解説・論文・索引』 pp. 210~215, ビクターエンターテイメント (2007)
- 33) 国枝春恵著 混声合唱とオルガンのための『おらほのみどり』, カワイ出版 (2011)
- 34) 「コラール」『ニューグローブ音楽辞典』第7巻, pp. 44~50, 講談社 (1993)
- 35) 「VI度の終止, 句読のニュアンスは (,) コンマ」島岡譲 他著『和声』理論と実習Ⅰ, p. 41, 音楽之友社 (2000)
- 36) 安田 寛著『「唱歌」という奇跡十二の物語』 pp. 162~164, 文藝春秋 (2003)
- 37) 『日本教科書大系 (近代篇)』二十五卷唱歌p. 586, 講談社 (1965)
- 38) 赤井 励著『原典による近代唱歌集成—誕生・変遷・伝播—解説・論文・索引』 pp. 70~75, pp. 210~215, ビクターエンターテイメント (2007)